

小麦の収穫後の管理について

(1) 緑肥作物のは種

緑肥のは種作業は、ほ場内に残った麦稈を分解促進させるためチョッパーで細断し、ロータリーなどで整地、ブロードキャスターやドリルでは種、その後覆土、鎮圧をします。

緑肥の効果を発揮させるため、適切な施肥と早期は種を実施し、生育量の確保に努めましょう(表1)。また、キタネグサレセンチュウ対策については、えん麦野生種(ヘイオーツ等)が有効です。

緑肥のすき込みは、分解を促進するため、チョッパーで細断した後、プラウですき込みます。

表1 緑肥の種類と特徴

緑肥作物	時期		は種量 (kg/10a)	施肥量 (kg/10a)			作付効果
	は種	すき込み		N	P	K	
えん麦	8/上~中	10/中~下	15~20	4~6	5~10	0~5	有機物供給、雑草抑制
えん麦野生種 (ヘイオーツ等)	8/上~中	10/中~下	10~20	5	5	0~5	有機物供給、キタネグサレセンチュウ抑制、 落葉病軽減
シロカラシ	8/上~下	10/中~下	2	5~8	5~10	0~7	有機物供給、易分解性窒素供給、 景観形成
ひまわり	8/上~中	10/中~下	1.5~2.0	4~6	8~10	0~10	有機物供給、菌根菌増加、景観形成

(2) 異品種連作、イネ科雑草対策

やむを得ず連作する場合、特に秋まき小麦を異なる品種で連作する場合は、野良ばえによる混麦の危険性が懸念されます。以下の対策を実施し混麦の防止に努めてください(図1)。

また、イネ科雑草が多い小麦畑が散見されます。多年生イネ科雑草の除草剤処理は耕起前の時期が最適です。小麦収穫後、雑草が15cm以上に再生してから散布します。

種子馬鈴しょの周辺ほ場では、生産された種いもが萌芽不良を起こす恐れがあるため、グリホサートの成分を含む除草剤の使用を避けて下さい。

図1 秋まき小麦異品種連作のフロー図（混麦防止策）

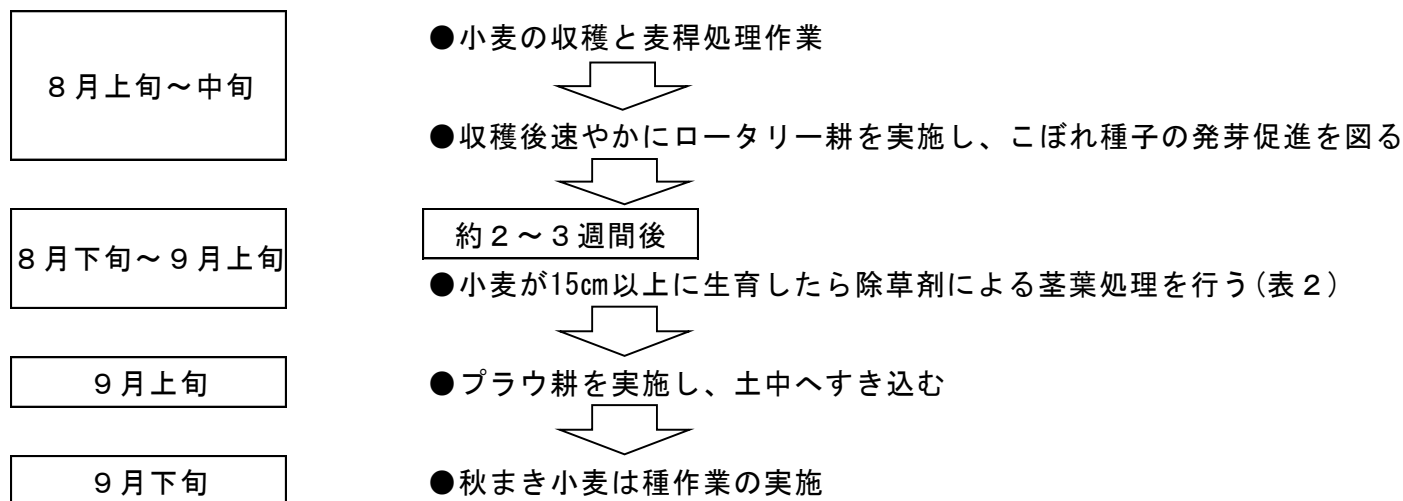


表2 麦類の耕起前雑草茎葉散布除草剤例

薬 剤 名	有 効 成 分	使 用 時 期	使 用 量	回 数
クサトリキング	グリサートイソプロピルアミン塩 41%	耕起前まで (雑草生育期草丈 30cm 以下)	250～500ml (水量 25～100L)	3
タッチダウン iQ	グリサートカリウム塩 44.7%	耕起3日前まで(雑草生育期)	500～750ml (水量 25～100L)	1
ラウンドアップ マックスロード	グリサートカリウム塩 48%	耕起前(雑草生育期)	200～500ml (水量 25～100L)	3

注1：展着剤は加用しない。

注2：散布後一定時間降雨のない日に散布する(剤によって1～6時間)。

注3：周辺の作物に薬液がかからないよう注意するとともに、ドリフト低減ノズル(ラウンドノズル等)の使用が望ましい。

注4：少水量散布の場合は、専用ノズルを使用する。

体調管理に気をつけ、農作業事故を防ごう！